

## 静岡県地学会結成10周年を迎えて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-09-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 通玄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00025737">https://doi.org/10.14945/00025737</a>

## 静岡県地学会結成10周年を迎えて

伊 藤 通 玄\*

静岡県を中心とする地学および地学教育の普及・発展をめざして、静岡県地学会が結成されたのは1964年6月28日のことであった。2回にわたる結成準備会を経て開かれた結成大会において会則を審議・決定し、初代会長には今はなき佐々倉航三先生、副会長に今なお本会のために多面的な活躍をいただいている小川賢之輔・老川寿太郎両先生のほか、12名の運営委員および2名の会計監査委員を選出し、本会の発足を正式に確認したのはつい数年前のことも思われるが、確かに10年1昔が経過しようとしていることを知り、感無量なものがある。

本会結成の準備段階からかわりもち、最初の運営委員のひとりとして本会の運営にたずさわったものとして、何よりも気がかりであったことは結成大会をもったものの、果してひとりだちできる組織体として、所期の目的を達成できるかということであった。幸いなことに多くの方々のご支援を得て、発足当初は個人会員100名ならず、団体会員25団体に過ぎなかった会員数も次第に増し、今や300名を越えるにいたり、機関誌「静岡地学」の発行、講演会、見学会、野外観察採集会、標本頒布会、実技講習会等々の活動を通じて、本県の地学および地学教育の普及・発展に一定の貢献をしてきたことはまことに喜ばしいことである。

発足当初の諸活動のうち、私にとってもっとも印象深いのは、本会発足記念事業として計画された静岡県産標準岩石標本の作製ならびに頒布であった。静岡県内の代表的岩石(火成岩8種、堆積岩8種、変成岩4種)を採取するために北は佐久間ダム・サイト(花崗岩)から南は伊豆下田(流紋岩)まで車を飛ばし、整形・ラベルはり・箱詰め・梱包・発送に汗を流したことが今ではなつかしく思い出される。前後2回にわたる延150組ほどの標本頒布はかなりの大事業であったが、静大教育学部地学研究会の学生諸君の精力的な協力によって、ほぼ所期の目的を達成することができた。

ついで静岡県産河川礫標本の作製・頒布(1965年)をおこなったが、狩野川・富士川・安倍川・大井川・天竜川と連続5日にわたる現地採集会をおこない、多数の会員の協力によって各河川を特徴づける代表的礫種の標本を採集し、後日これらの採集標本を集約のうえ、洗浄・一部破断・ラベルはり、箱詰め・梱包・発送をおこなったが、折しも県内小・中学校では岩石園づくりの盛んな時でもあり、岩石標本に対する関心は非常に大きかったように記憶している。こうした時代の反映でもあったろうか、このころの野外観察採集会はしばしば希望者が定員をはるかに上廻り、事務局では嬉しい悲鳴を上げたこともあった。

野外観察採集会といえ、日本平・有度山を皮切りに、県西部～愛知県鳳来寺山周辺、牧の原台地～御前崎周辺、富士火山周辺というように県内の代表的な野外観察地をつぎつぎに巡検し、それぞれの地域の地形・地質を中心とする自然の姿に直接学ぶ機会をもったが、私にとってもっとも印象深いのは加藤芳朗先生に案内していただいた第2回野外観察採集会(県西部～愛知県鳳来寺山)であった。西南日本の外帯から内帯への地質および地質構造の移りかわりを直接観察したり、本県では見られない設楽構

\* 静岡大学教養部

造盆地の地質および地質構造に接したほか、鳳来寺山自然科学博物館では周辺の地形・地質・岩石・鉱物・化石ばかりでなく、多種多様な動植物標本を観察する機会を得て、自然への興味・関心をいっそう深められた方が多かったように記憶している。

こうした活動をつみ重ねる中で、本会は次第にその力量を高め、その具体的あらわれとして本誌の内容も充実してきたように思われる。しかしながら会員数300名を越えるまでに成長してきた本会の現勢をみるならば、本誌の内容はより豊かなものになっていてよいのではなかろうか。小川副会長も指摘されているように、小・中・高等学校において理科を担当されている会員が相当数おられることを考慮すれば、自然科学教育を進展させる立場からの地学教材研究あるいは地学教育論が本誌をもっとにぎわせてもよいものではないだろうか。あるいは地学教育が総合的な自然観、進化論的な物の見方を基本におくべきものにあるならば、こうした観点からの問題提起等があってもよいのではなかろうか。何はともあれ、多くの会員の多彩な研究あるいは実践の成果によって本誌のいっそうの充実・発展を期待したい。

ところでこの10年間には、宇宙科学の分野でも地球科学の分野でもさまざまな飛躍的な発展があった。宇宙科学の分野では電波天文学の発展にともなう諸成果、月の直接探査をはじめとする惑星および惑星間空間の研究は、太陽系起源論あるいは地球進化論に新たな情報をつぎつぎに提供した。また海洋底を中心とする地球物理学的研究あるいは海洋地質学的研究はさまざまな新事実を明らかにし、古い地球観の変革を私たちに迫っている。その反面、自然科学の諸成果の誤用はさまざまな形で地球環境の汚染・破壊を促進し、資源の枯渇・食料不足・災害の多様化をもたらし、人類の未来に暗い影を投げかけている。そして今や人類および人類をとりまく地球環境を破滅に導かない唯一の道は、地球という総合システムをいかにコントロールできるかにかかっているといっよい。

1971年夏、ローマ・クラブの依頼によってMIJのプロジェクト・チームが提出した「人類の危機」レポートは、世界システムの発展を支配してきた物理的・経済的・社会的関係に大きな変化がないものと仮定した場合の地球の未来を、コンピューターによってつぎのように予測している。「食料・工業生産および人口は幾何級数的に成長し、ついには急速に減少する資源が工業の成長を低下させるにいたる。システムに内在するおくれのために、人口と汚染は工業化の頂点(2010年ころ)に達したあともしばらく増加しつづけるが、食料と医療サービスの減少による死亡率の上昇によって最終的に停止する(2050年ころ)。さらに同レポートは、さまざまな仮定にたった世界システムの未来を示したのち、遠い将来にわたって持続する均衡状態をつくりだすためには、完全な成長抑制政策をとるとともに、資源の再循環・汚染の防除、あらゆる形の資本の寿命延長、荒廃した土壌の再生等の技術政策をただちに導入するとともに、完全な産児制限による人口抑制が必要不可欠なことを予測している。しかもこうした安定化政策が2000年までに延期されたならば、もはや均衡状態は持続できないことを教えている。

地球科学は自然災害の予測や防災・減災にとどまらず、こうした地球の全般的の危機的状況にどう対処すべきかについても積極的な提言を求められている。私たちは身近な地域の自然の探究から出発しつつも、こうした地球の未来にかかわる根本問題にも広く眼を向けていかなければならないと痛感するこのごろである。何やら「静岡地学」にふさわしからぬ結末になったようであるがお許し願いたい。